

還暦を迎えるにあたって



旭川医科大学医師会
旭川医科大学保健管理センター

川村 祐一郎

私は昭和31年生まれの中年で、今年は5周して還暦を迎えることになります。若いころは、還暦を迎える人というのは、あたかも「老人のレッテルをとうとう張られることになった人」みたいに思っていました。自分がその段階に直面してみると、あまり老人になるという自意識は湧きません。先日、大学の同窓会がありましたが、ごく一部「あいつも老けたなあ」と思わせる者もいましたが、大体昔の付き合いと大いに隔たった感じはしませんでした。しかしそれは、単にわれわれが集団として平行移動しているだけで、他の若者からみれば十分老人に見えることでありましょう。

老人の自意識の問題はさておき、私は一昨年(平成26年)の秋に体調を崩し、2ヵ月ほど病気休養を余儀なくされました。前半は入院生活、後半は自宅療養でした。そこで、ベッドの中でつらつら考えたことは「これは、今まで大学人として教育・臨床・研究に没頭し、自分の体や生活を顧みなかったことのツケであろう」ということです。このツケを返済するには、これからは突っ走るのではなく、7~8割に仕事を抑えて、自分のことに時間や労力を割くべきなのだろうと考えました。月並みで誰でも考えることではしょうが、実際自分のことに時間を使うといっても、私は特定の趣味というものを持っていないので、具体的に何をどうするかというのはけっこう難しい問題であるということに気が付きました。

以前、本報の「緑陰随想」のコーナーにも書きましたが、私の妻は生け花のお師匠さんで、生徒に教えるのみならず、やれ研究会だ何だとかでけっこう忙しい(われわれの生活と近いですね)身分です。そのためばかりでもないですが、以前より、私が学会などで国内外の各地へ出張するたびに「一緒に行こうよ」と誘ってもまずrejectばかりでした。しかし昨年は「病み上がりの夫に同伴せよ」という名目で、しかしながら実は「夫婦水入らずで旅をしたい(それが自分のことに時間を使うという意味にもなる。すなわち学会で勉強するというよりも、旅ととらえる)」ため、半ば強制的に2つの学会に連れて行きました。6月にはイタリア、7月には京都へ連れだって旅をしました。私的には、この2つの旅で、中学生ごろから画集や美術の教科書などで見ていながら、実物を見ていなかったものを10以上も見ることができ、大変感動しました。代表的なものを挙げれば、イタリアではバチカン市国・システィーナ礼

拝堂の「最後の審判(ミケランジェロ)」、京都では修学院離宮です。どちらも持ち運べないので、展覧会などで回ってくることはないですね。修学院離宮は昔、予約制であることを知らずに門前払いを食ったという苦い経験もあり、それだけに感動もひとしおでした。妻はまた別のものに感動したらしく「来てよかった」ということでまとまりましたが、それはそれとして、両者とも、かなりゆとりをもって旅を楽しむことができました。

まあ一般的に考えて、自分の人生の残りは長くて1/3、多分それより短い可能性が高いですが、こんな生活を今後も続けられれば良いなと思っています。そのうち新たな日常の過ごし方も開発できるかも知れません。さしあたって北海道新幹線の開業は楽しみで、これにからめてどこかへ行こうかなと考えています。6周目の72歳で何か新たな展開があり、このコーナーでまた何か書ければと思います。



ローマにて、Bocca della Verita (真実の口)